

「三方よし」の理念継承に向けて



小林 文彦 CAOメッセージ

「三方よし」は近江商人の心得を表す代表的な言葉として社会に定着していますが、実は「三方よし」という言葉自体は、近江商人が活躍した江戸・明治期に使われたものではありません。現在、近江商人研究における第一人者でいらっしゃる滋賀大学の宇佐美英機名誉教授によれば、元滋賀大学名誉教授の故小倉栄一郎博士が1988年に上梓された著書の中で使用したものが最初であるということです。

小倉博士はその著書の中で、近江商人の精神について「三方よし」というのがある」と紹介している。曰く、「売手よし、買手よし、世間よし」という商売でなければ商人は成り立たないという考え方である。時代は下るが湖東商人の間で多く聞く。初代伊藤忠兵衛は熱心な仏教信者で『商売は菩薩の業』と説いたが、その心は『商売道の尊さ』、売り買い何れをも益し、世の不足をうずめ、御仏の心になつもの』という共存共栄の精神

である。」と著述し、「三方よし」の表現に続き、その実例として初代忠兵衛の言動を紹介されています。

宇佐美教授によると、「三方よし」という言葉自体は上記のとおり近江商人の精神を表す標語として後世につくられたものですが、その考え方は、近江商人の先達を尊敬する中で初代伊藤忠兵衛が最初に唱えたものであると結論づけています。

言い換えれば、創業者である伊藤忠兵衛の言葉が、いわゆる「三方よし」の実質的な語源であると言つてかまわないと思います。これは大変誇らしいことです。

そして、この初代忠兵衛の理念は「遺訓五箇条」として二代忠兵衛に継承され、その後代々の経営者に受け継がれ現在に至っています。岡藤社長も初代および二代忠兵衛を尊敬され、毎年株主総会終了後、両忠兵衛翁の墓前でその報告を行われていることは皆さんご存じのことと思います。

現在、伊藤忠商事およびグループ会社の経営幹部に創業地を訪問いただき、創業の理念に触れそれを共有していただく取り組みを入れています。本年度は本社役員をはじめグループ会社社長や経営幹部を中心に、延べ340名が創業地を訪問する予定です。我々一人ひとりが創業者の提唱した理念に誇りを持ち、これを継承していくことを通じて、伊藤忠グループが一層の発展を続けていくようにしなければならぬと思っています。

教えて!

近江商人とは?

近江国(現在の滋賀県近辺)に本宅(本家・本店)を置いて他国稼ぎをした商人。一方で「地商い」とは、近江国のみを商圏とする商人を指す。

初代伊藤忠兵衛は、父長兵衛のもとで地商いとして出発し、後に近江商人に転身した。

伊藤忠商事の創業はいつ?

初代忠兵衛が「近江商人」として他国稼ぎを開始した1858年(安政5年)を伊藤忠商事の創業年としている。初代忠兵衛は、激動の時代の中で、「積極・機敏・合理」の経営方針のもと、本日の礎を築いた。同じく初代忠兵衛を創業者とする丸紅も同年に創業年と位置付けているが、宇佐美教授によれば両社は「言わば『卵性双生児』みたいなものですな」とのことである。

伊藤忠兵衛の仕事観は?

初代忠兵衛は、商業という営為に誇りと信念を強く持っていた。

二代目忠兵衛は、父である初代を回顧し、「全精神を仕事に打ち込み、そしてその事業なるものは神聖なもので、己れならびに己れの事業団体の存在は、世に寄与し光輝あるものとの信念」を持ち、仕事に邁進したと評している。



初代忠兵衛一家。前列左から2人目が二代忠兵衛



初代伊藤忠兵衛(1842~1903)



近江商人の旅姿(滋賀大学史料館提供)